

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第二十八弾

神社本庁自壊の理由―その七

証人尋問で原告の稲、瀬尾両氏が証言 被告神社本庁は幹部職の社内不倫が発覚

三月九日、職員宿舍の廉売疑惑をめぐり神社本庁から懲戒処分を受けた元部長二名が提訴している地位保全裁判の証人尋問が東京地裁で行われた。二月二十日に続く二回目の証人尋問で、併せて原告本人二名を含む原告側三人、被告側四人が証言した。

被告側の証人は何れも職舎売却当時部長であった神社本庁の元職員であり、神社本庁を代表する田中総長と黒幕である神政連打田会長は出廷しなかった。職舎の不正廉売を子飼いの職員を使って画策したのと同様、裁判の対応も子飼いの職員に「しつかりやれ」と指示しているのだろう。しかし、証人尋問を傍聴した関係者は、田中・打田両氏の関与を改めて確信したようだ。本号でそのあらましをお伝えする。

被告側小野・原田両氏の証人尋問

最初に証言台に立ったのは小野氏である。神社本庁総務部長をしていた小野氏は、平成二十八年に大分県の宇佐神宮に宮司として赴任した。ディンプル社への職舎売却にあたり、多大の功績を認められての栄転らしいが、八幡様の日は節穴ではない。小野宮司が赴任するや地元とトラブル続きで、宮司の退任を求める署名まで起こされている身分である。

証人尋問では小野氏が神社本庁と関係の深い財団の事務局長をしていた二十年前にも、財団ビルの不動産売買を取り切ったディンプル社に多大の便宜を図っ

ていたことが判明した。その理由について問われると、「記憶にないが、役員の方政治的判断によるもの」と、この世にいない人たちに責任を負わせる答弁を連発し、傍聴人の失笑を買ったようだ。続いての原田氏は平成二十九年八月まで神社本庁秘書部長の立場にあり、稲瀬尾両氏の懲戒処分を担当した元職員である。原田氏は何故か、処分をめぐる疑問点について問われても沈黙ばかり。何のために証言台に立ったのか意味不明というのが傍聴人の感想である。

原告稲・瀬尾両氏が証言台に

後半は原告本人が証言台に立ち、まず瀬尾氏が答弁。被告側は頻りにディンプル社への職舎売却は、当時の瀬尾部長が進めたものであることを立証しようとしたようだが、被告側の証人たちが既に馬脚を現している。後の祭り。瀬尾氏は当時、それが仕組まれたものとは知らずに、仲介を頼むと時間がかかる、売却価格がわからないと会議にかけられない、ディンプル社の高橋社長に任せておけ、などの指示を小野氏や田中総長から受けて、ディンプル社への売却へと方針を転換したのだが、そのことへの反省を述べた上で、被告側の主張にはしっかりと反論したという。

最後に証言した稲氏は、疑惑発覚後の自らの対応を陳述。瀬尾氏と同じく、反対尋問にも率直に答弁したので、被告側代理人の内田弁護士は威圧的な尋問が際立つことになったようだ。更に稲氏の証言により、小野氏が事務局長の立場で担当した二十年前の財団ビル購入の際に、ディンプル社が融資を受けた人物と反社勢力との具体的な繋がりまで明らかにしたというから驚きだ。

神社界は不倫に寛容？

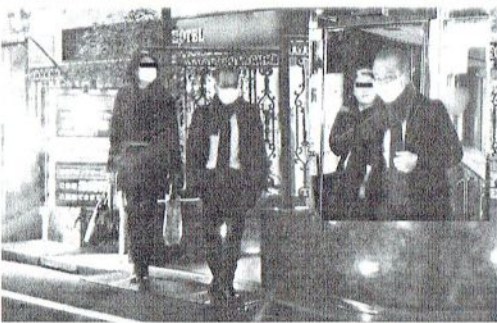
問題は裁判の争点である職舎売却疑惑だけではない。三月六日にダイヤモンド・オンラインが神社本庁幹部であり、この

裁判を担当する小間澤秘書部長と部下である秘書課長との不倫疑惑を、ラブホテルから並んで出てくる写真付きで報じたのだ。何とこの二人、二月二十日の証人尋問の際は仲良く並んで傍聴席に座っていたという。さすがに発覚直後の三月九日の証人尋問では謹慎しているものと思われたが、小間澤氏が一人で裁判を傍聴していたというから驚きだ。

自壊まで秒読み態勢にはいったか

田中・打田両氏は疑惑が発覚した四年前の時点で、潔く身を引くべきであった。ところが、真相究明のための調査委員会にまで介入して疑惑を隠蔽した上に、疑惑を指摘した職員二名を懲戒処分にした。処分を受けた職員から提訴されると、裁判の対応経過を役員会にすら報告せず、正当な懲戒処分であるとかまかし続けて現在に至ったのである。それだけではない。田中氏は一昨年の役員会で辞意を表明したのに、事実を改竄した文書を全国的神社本庁に通知して辞意を撤回。昨年の神社本庁の役員改選では、対立候補を騙し討ちにして生き残り、四期目の総長の座を手にした。

しかし、その後も疑惑を裏付ける真相が裁判を通じて次々と発覚した上に、側近でもある秘書部長の不倫疑惑まで報道される始末となった。もはや断末魔に近いが、これまでの流れを振り返れば、田中・打田両氏は今も生き残りのために秘策を練っていることだろう。それは自壊への最短コースとなるに違いないが。



「ダイヤモンドオンライン」3月2日の記事より